



特別支援学校（肢体不自由）における移行支援と卒業後の生活実態に関する研究動向

垂髪, あかり

(Citation)

大学評価学会第16回全国大会

(Issue Date)

2019-03-03

(Resource Type)

conference object

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90005699>



特別支援学校（肢体不自由）における

移行支援と卒業後の生活実態に関する研究動向

垂髪あかり（神戸大学修了生）

1. はじめに

深刻化する障害の重度・重複化により、特別支援学校（肢体不自由）の進路状況は、就職率が激減する一方で、社会福祉施設等への入所が増加している。そのため、自宅で生活する者が多くなる傾向は近年に始まったことではない。こうしたなか、「キャリア形成」や「自立」観の捉え直しが行われている。松矢（2003）は、「職業経歴という意味でのキャリア形成を広義に捉える必要がある」とし、「家族の中で、学校あるいは地域社会における仲間集団を始め、いろいろなレベルでの社会的な関わりの中で、いろいろな役割活動の主体的な担い手になることを広義のキャリア形成として捉え、そのような活動を通して自己の生き方の設計と経歴をいかに豊かにしていくかという考え方が必要」と指摘している。また森崎（2005）は、「身辺自立や経済的自立という従来の概念ではなく、学校から地域社会への移行を念頭に置きながら、生徒自らが（支援を活用し）今後の生活を自立的に選び取ろうとする新たな自立の観点から検討していく必要」と指摘している。

こうした現状を踏まえて、本研究では、特別支援学校（肢体不自由）における移行支援および生徒の卒業後の生活実態に関する研究動向について整理し、新しいキャリア形成や自立観に立った青年期の発達保障のあり方について検討する。

2. 方法

国立情報学研究所学術情報ナビゲータ Cinii を用いて、データベース検索を2018年12月に行った。検索に用いたキーワードは、『肢体不自由』『移行支援』と『肢体不自由』『卒業後』とした。『肢体不自由』『移行支援』のキーワードを用いて検索した24件の論文のうち、特別支援学校（肢体不自由）における移行支援と卒業後の生活実態に関する論文は19件であった。『肢体不自由』『卒業後』のキーワードを用いて検索した31件の論文のうち、特別支援学校（肢体不自由）における移行支援と卒業後の生活実態に関する論文は27件であった。本稿では上記43件の論文について分析を行った（表1）。

3. 結果と分析

分析対象とした46件の論文は、（1）学校（教育）側（2）卒業後の受け入れ先（施設や企業等）（3）学校（教育）および卒業後双方から検討されたものに大別された。

（1）学校（教育）側からの検討

学校（教育）側から検討された論文は28件であった。そのなかでは、進路指導の取り組みを通して移行支援の現状や課題を報告したものが多かった。就労や進学に向けた移行支援の報告がなされていたのは6件であり、実践自体報告においても、就労や進学を扱うものが少なくなっていることが窺えた。なお、重度者を含む肢体不自由児・者の自立と移行支援についての近年の動向について整理した論文は2件であった。就労・進学に向けた移行支援以外の論文は、次のとおりであった。

①生徒の実態変化と進路指導の変遷

1990年代からの生徒の実態変化と進路指導の変遷について扱った論文には、加藤（1989）、江口・千

田・越智 (1989), 松矢 (2003), 江田・田川・石本 (2007), 竹内・安藤 (2018) のものがあつた。

加藤 (1989) は、在校生の重度・重複化が表面化し始めた 1980 年代末期において、学校卒業後の社会参加の在り方として、「その人が、どこに、何に、生きがいを見出し、友だちや仲間と、社会と、どのようにつながり、関わっていきっていくか」(加藤 1989 : 673) を考えていく必要があることを指摘し、江田ほか (1989) は、卒業生の進路の一つとして「心を満たしてくれる場所」(江田ほか 1989 : 665) としての福祉作業所の意義を提起した。

また、江田・田川・石本 (2007) は、児童生徒の実態変化を社会生活能力の側面から捉え直し、それらが卒業生の進路選択にどのような影響を有しているのかを明らかにした。さらに竹内・安藤 (2018) は、肢体不自由教育を先進的に牽引してきた東京都立光明特別支援学校における進路指導について取り上げ、児童・生徒の重度・重複化の過程において、進学や就職する者が大幅に減少し、社会福祉施設への入所・通所が急速に増加していった経過を明らかにした。そして、こうした生徒の実態の変化に伴って、進学や就職を目指した進路指導から、一人一人の実態に応じた幅広い多様な進路を前提とした進路指導へと変化したことを明らかにした。

②自己実現・余暇活動

高等部 3 年間にわたる移行支援の取り組みを通して、生徒が自分自身の内面を見つめ、卒業後の自己実現ができるようなくらしの想定を目指した実践には、保坂 (2003), 檜木 (2006), 土橋 (2007), 田村 (2010), 佐々木 (2018) の報告があつた。

保坂 (2003) は訪問教育における卒業後を見通した取り組みについて、また檜木 (2006) は、自らの気持ちを表現することが苦手であつた在宅療養児 (要医療的ケア) が、高等部 3 年間にわたる移行支援の取り組みを通して学習・生活への意欲を高め、友人との交流や外出経験を積み活動の充実感、達成感を感じ、自己肯定感を高め、「生活の主体者」(檜木 2006 : 27) として社会に出た実践を報告した。

高等部における授業での学習を通して、卒業後の余暇活動の充実につなげていった報告には、佐々木 (2018) や田村 (2010) のものがあつた。土橋 (2007) は、小・中学部で獲得してきた力を基礎にして、高等部 3 年間にわたる校内・校外実習を通して生徒たちが「自分づくり」(土橋 2007 : 22) していく過程を、田村 (2010) は「くらす、はたらく、たのしむ」という観点から卒業後の生活を見通した授業実践を報告し、佐々木 (2018) は、美術教育での取り組みを卒業後の余暇活動に結びつけた実践について報告した。

③個別の教育支援計画、個別の移行支援計画

個別の教育支援計画や個別の移行支援計画を活用し、有効な進路指導を行った報告には、中田 (2002), 和田・中 (2003), 佐々木ほか (2006), 佐々木 (2011) のものがあつた。

和田・中 (2003) は、生徒や家族が福祉サービスを利用してニーズを顕在化させることが、社会資源の開拓につながるという考えのもと、重度の肢体不自由児への個別の移行支援計画を適応した進路指導の実践について報告した。家庭以外で自分らしさを出すのが苦手であつた生徒への進路指導を通して、コミュニケーション手段が広がり家族以外の人とのやりとりを楽しめるようになった事例であつた。また、佐々木ほか (2006) は、重度・重複障害のある生徒が卒業後、地域でどのような生活を送りたいかについて本人および保護者への希望を調査し、それに対する進路指導と個別の移行支援計画の在り方について 4 校の実践事例を分析・考察した。

④進路指導における校内組織作り，関係機関との連携

進路指導における校内組織体制の構築や，関係機関との連携・協力について取り上げた報告には，仁部（2003），川口（2006）や友永（2007）中山・丹野（2010）のものがあつた。仁部（2003）は，教員，保護者，企業，医療機関と連携し，卒業後の生活を考えていった実践について，川口（2006）は，北海道における広域な居住地で卒業後の進路資源が乏しい地域の特別支援学校において，学校と保護者および療育センターが連携した移行支援の実態と課題について報告した。また，中山・丹野（2010）は，小学部・中学部・高等部の各教員と自立活動専科の教員から構成された組織によって，校内児童生徒一人ひとりの「卒業後の姿」を具体化することで現在の課題を捉えるといった取り組みを報告した。家庭への調査により進路についての保護者のニーズを把握した上で，関係機関と連携・ネットワーク構築を行い，本人と保護者の願いやニーズに沿った移行支援を行ったのは友永（2007）の報告であつた。

（2）卒業後の受け入れ先（施設や企業等）側からの検討

①保護者の学校教育に対する評価

一木ほか（2014）は，卒業生の生活実態と保護者の学校教育に対する評価について調査し，在学時の自立活動を主とした教育課程における実践の成果と課題を明らかにした。

②自己実現・余暇支援

卒業後の自己実現や余暇支援に関しては，小島（2017）が，高校卒業後の成人移行期にある肢体不自由者への，スポーツを通しての健康管理と余暇支援について検討した。

③卒業後の受け入れ先からみた学校教育

特別支援学校の卒業生を実際に受け入れている機関から，そこでの卒業生の実態を踏まえた学校教育の課題や期待について報告した論文では，藤原・荒川（1986），高村（2000），末永（2006），多田（2007），天片（2007）のものがあつた。

藤原・荒川（1986）は，無認可小規模授産施設における重度肢体不自由者（卒業生）の適応状態について調査し，障害の軽重による適応度の差や内容について明らかにした。また高村（2000）は，授産施設，更生施設および小規模作業所における卒業生の生活実態と各施設での課題を挙げた。

末永（2006）は，自治体の専門相談支援機関の実践を通して特別支援学校との連携の在り方について検討し，特別支援学校への期待として，校内体制の整備のみならずもっと学校が地域に開かれ，地域の中心となって教育以外の領域にも働きかけていくことを挙げた。多田（2007）は，重度・重複障害者の通所施設の，天方（2007）はグループホームにおける重度身体障害者の活動の様子を紹介し，利用者（卒業生）の生活をより豊かに支えるためにも，在学中におけるコミュニケーション指導の重要性（多田2007，天方2007）と，金銭管理や余暇についての指導（天方2007）の必要性を挙げた。

（3）学校（教育）および卒業後，双方から検討

学校教育と卒業後の進路先を明確に関連づけて検討した論文では，新井（2005），新井（2005），川住（2007），赤塚（2007），宮本ほか（2015）のものがあつた。

川住（2007）や赤塚（2007）は，学校側の取組と卒業後の青年らへの支援双方を通して，肢体不自由児にとっての自立とは，キャリア形成とは，さらに自己実現とは，と問い直し，本人主体の生活を創っていく必要性を提起した。宮本ほか（2015）は，在学中に取り組みされた自立活動と卒業後の地域生活と

の関連について明らかにされていないことを課題に、その関連性について調査した結果、卒業後の自立活動は保護者に一任されていることが多く、卒業後のアセスメント方法が課題であることを指摘した。

表1 分析した論文の内容ごとの整理

学 校	進路調査	上石・日暮・住友（2000）	
	進路指導の変遷	加藤（1989）、江田・千田・越智（1989）、松矢（2003）、江田・田川・石本（2007）、竹内・安藤（2018）、	
	実践報告	自己実現／ 余暇活動	保坂（2003）、樫木（2006）、土橋（2007） 田村（2010）、佐々木（2018）
		個別の教育支援計画／ 移行支援計画	中田（2002）、和田・中（2003）、佐々木・高野・長塚（2006）、佐々木（2011）
		校内組織／関係機関と の連携	仁部（2003）、川口（2006）、友永（2007）、中山・丹野（2010）
就職・進学	市川（2003）、松原（2006）、田中（2006）、吉村（2007）、飯窪（2010）、加藤（2016）		
卒 業 後	保護者	一木・池田・青木・安藤（2014）	
	自己実現／余暇	小島（2017）	
	受け入れ機関	藤原（1986）、高村（2000）、末永（2006）、多田（2007）、天方（2007）	
双	新井（2005）、新井（2005）、川住（2007）、赤塚（2007）		
他	研究動向	森崎・岩田（2004）、森崎（2005）	

4. おわりに

分析の結果、特別支援学校（肢体不自由）における移行支援に関する論文では、学校側からの実践報告が多く、個別の教育支援計画および移行支援計画を活用しながら卒業後の自己実現や本人主体の生活づくりに向けた支援が行われていたことが明らかになった。一方、学校卒業後の生活実態を明らかにした論文は在学中のもの比べると少なく、特に重度・重複障害のある人たちの地域生活の実態や支援の課題を明らかにしていく必要があると考えられる。こうしたなか、1960年代前半から障害の重い人たちを受け止めてきた重症心身障害児施設びわこ学園では、学校卒業後も入所および通所施設を利用しながら豊かに地域生活へ移行し、「本人の『こうありたい』という生活への想い」（びわこ学園2012：186）が実現された事例等が報告されている。どんなに重い障害があっても、様々な人と関わりをもちながら自分の世界を広げ自分らしい青年期・成人期を生きていく—こうした実践および研究の蓄積によって、職業経歴にとらわれないキャリア形成や自立観が確立されていくのである。

【分析した文献一覧】

- ・赤塚光子「障害者の移行支援に関する現状と課題」『肢体不自由教育』第17号、4-9.
- ・天方宏純（2007）「グループホームと重度障害者の自立支援」『肢体不自由教育』第179号、30-33.
- ・新井雅明（2005）「移行支援の基礎（1）移行支援の基本的な考え方」『肢体不自由教育』第168号、46-49.
- ・新井雅明（2005）「移行支援の基礎（1）移行支援の基本的な考え方」『肢体不自由教育』第169号、48-51.
- ・飯窪美紀子（2010）「移行支援教育におけるコース制と授業の工夫」『肢体不自由教育』第193号、

24-29.

- ・市川敬子 (2003) 「高等学校に準じる教育課程における移行支援の取組—学校設定教科「職業」の実践から」『肢体不自由教育』第 162 号, 20-25.
- ・一木薫, 池田彩乃, 青木麻由美, 安藤隆男 (2014) 「特別支援学校 (肢体不自由) 卒業生の生活の実態と保護者の学校教育に対する評価」『特殊教育学研究』第 52 巻第 2 号, 85-95.
- ・上石晶子, 日暮眞, 住友眞佐美 (2000) 「東京都立肢体不自由養護学校に在籍する重症心身障害児 (者) の卒業後の進路希望について」『小児保健研究』第 59 巻第 3 号, 459-465.
- ・江田寿栄夫・千田益生・越智信夫 (1989) 「地方での肢体不自由養護学校卒業後の進路」『総合リハビリテーション』第 17 巻第 9 号, 659-665.
- ・江田裕介・田川元康・石本真佐子 (2007) 「肢体不自由児の社会生活能力の発達と学校卒業後の進路」『和歌山大学教育学部紀要 教育科学』第 57 号, 33-41.
- ・檜木暢子 (2006) 「家庭から学校へ、そして社会へ—在宅療養児の自己実現と社会参加に向けての取組 (特集 卒業後を見通した支援の在り方)」『肢体不自由教育』第 174 号, 22-27.
- ・加藤寛二 (1989) 「肢体不自由養護学校卒業後の進路指導」『総合リハビリテーション』第 17 巻第 9 号, 667-673.
- ・加藤隆芳 (2016) 「卒業後を見据えたキャリア教育の展開: 高等部における職場実習を中心に」『肢体不自由教育』第 225 号, 22-27.
- ・川口隆平 (2006) 「広域な居住地における進路支援」『肢体不自由教育』第 174 号, 16-21.
- ・川住隆一 (2007) 「移行支援に携わる方々への期待」『肢体不自由教育』第 179 号, 10-15.
- ・小島匡治 (2007) 「列島縦断ネットワークキング 神奈川 成人期重度肢体不自由者に対する余暇支援, 『楽しく体を動かそう: 高校卒業後成人期グループ活動』の取り組み」『ノーマライゼーション: 障害者の福祉』第 37 巻第 3 号, 55-57.
- ・小島匡治 (2007) 「障害者スポーツセンターにおける成人移行期の肢体不自由児者支援」『日本体育学会大会予稿集』第 68 号, 294
- ・佐々木稔 (2011) 「卒業後の進路確定に向けた『個別の教育支援計画』活用の実際」『肢体不自由教育』第 199 号, 16-21.
- ・佐々木順二, 高野聡子, 長塚修一 (2006) 「肢体不自由養護学校における重度・重複障害生徒の移行支援ニーズへの対処の在り方—進路指導と個別移行支援計画の意義」『福岡教育大学障害児治療教育センター年報』第 19 号, 27-37.
- ・仁部さおり (2003) 「『自分の力でできること』『わかること』が増えてきた A さんとのかわりから: A さんが等身大の自分と向き合うために」『情緒障害教育研究紀要』第 22 巻, 111-116.
- ・末永カツ子 (2006) 「特別支援教育との連携・協働に向けて—専門相談支援機関から養護学校への期待」『肢体不自由教育』第 174 号, 10-15.
- ・高村法保 (2000) 「肢体不自由養護学校高等部卒業生の生活実態—授産施設・更生施設・小規模作業所の事例を通して」『SNE ジャーナル』第 5 巻第 1 号, 189-205.
- ・多田真 (2007) 「重い障害のある方たちの生活支援と教育・福祉の連携」『肢体不自由教育』第 179 号, 38-41.
- ・竹内博紀・安藤隆男 (2018) 「東京都立光明特別支援学校における進路指導の変遷」『障害科学研究』第 42 巻第 1 号, 125-138.
- ・田中好國 (2006) 「保護者・卒業生・地域との広域連携を目指した情報技術 (IT) の活用—情報通信ネ

- ットワークを活用した教育実践」『肢体不自由教育』第 174 号, 28-33.
- ・土橋恭子 (2007) 「移行支援の充実に向けた進路指導—高等部での取組を中心に—」『肢体不自由教育』第 179 号, 22-25.
 - ・友永好昭 (2007) 「実践報告 重度・重複障害児童生徒の進路・地域福祉の充実をめざして—学校における取組 (特集 移行支援の充実)」『肢体不自由教育』第 179 号, 16-21.
 - ・中田吉樹 (2002) 「個別移行支援計画作成の試み—生活の質の向上を目指して」『肢体不自由教育』第 157 号, 21-26.
 - ・中山忠史・丹野傑史 (2010) 「具体的な長期目標設定に向けた組織的取り組み—A 特別支援学校の「卒業後の姿の検討会」に着目して」『障害科学研究』第 34 巻, 75-85.
 - ・藤原賢吾・荒川勇 (1986) 「重度肢体不自由者の養護学校高等部卒業後の進路における無認可小規模授産施設の意義と課題」『日本教育学会大会研究発表要項』第 46 巻, 61.
 - ・保坂俊行 (2003) 「高等部訪問教育における卒業後を見通した取組」『肢体不自由教育』第 162 号, 26-30.
 - ・松原省吾 (2006) 「実践報告 一人一人のライフステージに応じた支援の在り方」『肢体不自由教育』第 174 号, 34-39.
 - ・松矢勝宏 (2003) 「個別移行支援計画の在り方と実際」『肢体不自由教育』第 162 号, 11-19.
 - ・森崎博志 (2005) 「重度の肢体不自由児・者の自立支援に関するわが国の近年の動向 : 肢体不自由養護学校における『個別移行支援計画』を中心に」『特殊教育学研究』第 43 巻第 2 号, 149-157.
 - ・森崎博志, 岩田あさ美 (2004) 「肢体不自由児・者における自立と移行支援に関する近年の動向」『治療教育学研究』第 24 号, 67-77.
 - ・吉村隆樹 (2007) 「働くために大切なこと-企業に就職して」『肢体不自由教育』第 179 号, 34-37.
 - ・和田利明, 中美子 (2003) 「個別移行支援計画を適用した進路指導—肢体不自由を主とする重度・重複障害児に対する実践から」『肢体不自由教育』第 162 号, 34-37.

【引用・参考文献】

- ・松矢勝宏 (2003) 「個別移行支援計画の在り方と実際」『肢体不自由教育』第 162 号, 11-19.
- ・森崎博志 (2005) 「重度の肢体不自由児・者の自立支援に関するわが国の近年の動向 : 肢体不自由養護学校における『個別移行支援計画』を中心に」『特殊教育学研究』第 43 巻第 2 号, 149-157.
- ・びわこ学園 (2012) 「在宅からケアホームでの自立生活に向けて～地域生活における通所施設の役割～」『社会福祉法人びわこ学園 50 周年記念誌「生きることが光になる」』社会福祉法人びわこ学園.